

クヌギのつきき時期と穂木の採取時期について

熊本県林業研究指導所

○新谷 安則・内村 悦三

1. はじめに

クヌギのつきき時期と穂木の採取時期については、クリなどの落葉果樹類でおこなわれているつききに準じて実施してきたが、当所における精英樹のつきき繁殖が年により相当のバラツキがみられ、安定した活着率を得ることができないので、多量のつききをする立場上、各種の要因のうち、まずつききの時期と穂木の採取時期をとりあげて検討を加えた。

2. 材料と方法

1) 時期別つきき試験

前年春期にまきつけ育苗した1年生苗木を台木とし、一方、穂木は精英樹である阿蘇1号、菊池9号、上益城3号の3クローンをもちい1972年2月24日に採穂して、湿ったオガクズとともにポリ袋にいれ、5℃前後の冷蔵庫に貯蔵した。

つききは1972年3月21日より5月1日まで10日おきにおこなった。1クローン1時期当りのつきき本数は20本とし、これらをランダムに配置した。

つきき法は居つぎの切りつきとし、つきき後直ちにポリ袋(厚さ0.06mm, 幅5cm, 長さ18cm)で被覆し、その後開葉して葉長が5~6cmになったものから順次ポリ袋を取り除いていった。

2) 穂木の採取時期別試験

台木は1回代替2年生苗木であり、また穂木は所内実験林の約15年生母樹3本(No. 504, 505, 601)と精英樹クローンの菊池8号、球磨9号、阿蘇17号(後半のみ採穂)の計6クローンであり、1971年1月18日から4月1日まで8回にわたり採穂して、1)と同様にして貯蔵した。

またつききは1972年4月3日~7日におこなったがその他のことについては1)と全く同様である。

3. 結果と考察

1) 時期別つきき試験

つききの適期を判断する目安として、台木20本について開芽の時期を調べ、また、1972年8月1日につききの活着状況を調べたが、その結果を図1に示す。

台木の開芽は3月25日から4月23日までの約1か月

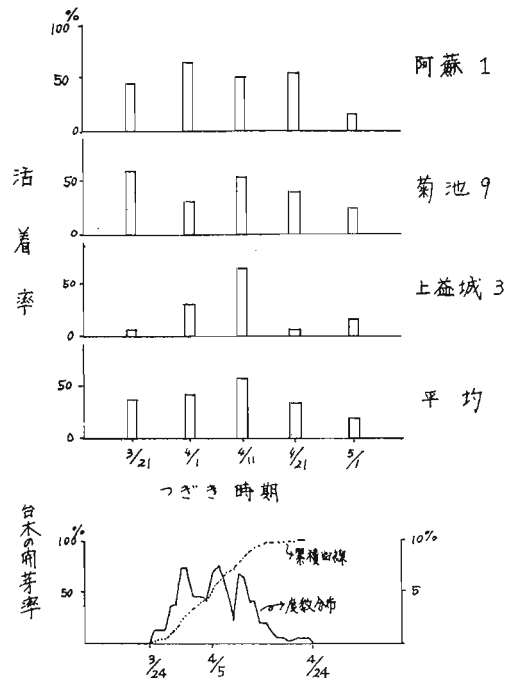


図1 つきき時期別の活着率と、クヌギ台木の開芽率の累積曲線と度数分布図

間続き、その中心は4月5日と6日の間にあり、95%の範囲は3月25日から4月17日までであった。

供試3クローンのうち、阿蘇1号、菊池9号の各時期における活着率はほぼ似た傾向を示したが、上益城3号は特に3月21日と4月21日つききで上記2クローンと異なった傾向を示した。このことが上益城3号の特性なのかどうかは本試験では明らかにできなく、再検討を要するが、少なくとも台木の開芽期の中心前後の4月1日と4月11日つききの活着率は良好であり、開芽の終りに当たる4月21日つききでも、上益城3号を除き他の2クローンは4月1, 11日と同様良好であるが、台木の樹液の上昇が旺盛となりつつある5月1日つききでは明らかに活着率が低下する。従ってつきき時期のかわりは一応台木の開芽期の終了時と考えてよさそうである。また3月21日つききでも上益城3号

以外は良好であるので、それ以前についても検討する必要があるが、少なくともこの試験からは3月21日か

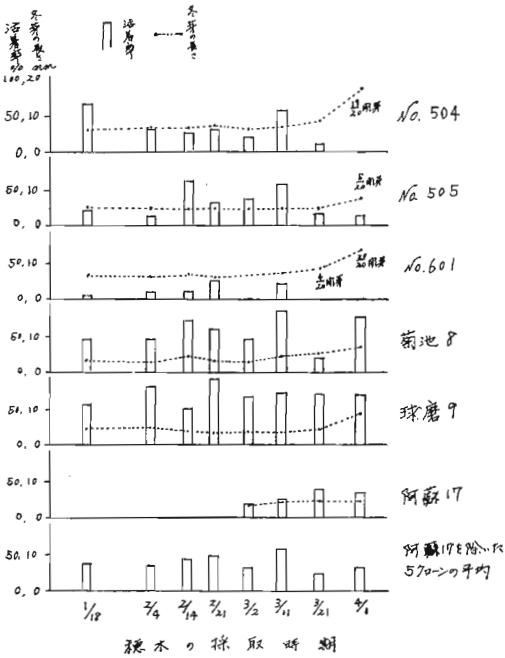


図2 穂木の採取時期別、つぎき活着率と穂木の冬芽の長さ

ら4月21日までを一応のつぎき時期と考えてよく、その期間は意外に長いようである。

2) 穂木の採取時期別試験

1972年8月1日に活着率を調べ、また実際につぎきした穂木とは別に、クローン別時期別に各クローン20本ずつ穂木を選び冬芽の長さを調べたが、これらを図2に示す。

穂木の冬芽の長さは、3月11日頃までは変わらず、ほぼ休眠状態を維持しているものと思われるが、3月12日になるとクローンによっては伸長し始め、一部開芽したが、4月1日には供試6クローンのうち5クローンは冬芽が動き始め実験林からの3クローンはみな開芽した。

穂木の採取時期による活着は、休眠期間と思われる3月11日頃までの穂木では、ほぼ同じ活着率を維持するが、3月21日以降になると休眠を破られた実験林からのクローンについては活着が著しく低下し、開芽した穂木は全く活着しなかった。しかし、精英樹クローンについては休眠が長く4月1日採穂でも活着は低下しなかった。

しかしながら、一般に大量に採穂する場合はすべての穂木が休眠していることが必要であるので、当年の気象条件下では、3月11日以前に採穂した方が良い。